初学者のための平仮名字形
――「お」と「む」の点――

北　山　聡　佳

はじめに

近年、小学校入学以前から平仮名や片仮名、さらには漢字の学習をする子どもが増えた。片仮名や漢字はともかく、平仮名を読み書きできる幼児は多い。しかし、幼児のための市販の文字学習教材は、いわゆる手本が活字であることが多く、活字のデザインの違いから、字形がそれぞれ異なる。さらに、小学校に入ると、文字学習はまず平仮名から始められるが、そこで用いられる手書き手本の字形にも違いがある。

平仮名は、文字教育の初期段階に用いる重要な教材である。その字形が異なることは、許容の範囲への理解がない文字の初学者、特に子どもたちの学習の弊害となり得る。そこで、本論文では、文字の初学者のための平仮名字形（手書き手本）について考察し、書き易い字形や書き方を追求する。しかし、これは文字統一を目標とするものではなく、文字教育の初期段階に提示するのに相応しい、平仮名の字形や書き方を考えるものである。本研究によって、家庭や幼稚園、塾、小学校などにおける、子どもの文字教育に貢献したい。

1. 文字初学者のための平仮名字形検討の意義

1-1. 子どもの文字習得と手本

小学校入学以前の子どもは、成長するにつれて文字への興味が湧き、様々な方法で文字の習得をしようとする。例えば、山田（1980）は、ある幼児が生活の中でどのように文字と関わり、習得していくかについて詳しく観察している[(1)]。この幼児は、母親の行為の模倣に始まり、母親の書字行為の模倣や、様々な場面で見た文字を模倣することによって書字能力が発達している。これは、この幼児に限らず、多くの子どもにあてはまる。文字を文字として認識する前から、多くのものを模倣し、描いたり書いたりしながら書字の基礎的能力を獲得し、やがて文字を文字として書くようになる。

文字を習得しようとする心理について、野呂（1980）は「幼児といえども文字という文化遺産

を身につけ、人間らしさへ、おとなの世界へ近づきたい欲求をもつ」と述べ、文字を習得することによって、「文字を知っている子どもが、〈文字を知っている〉が故に、エリート意識を」持つことがあるという[2]。このような子どもの欲求や要求に応え、文字学習に取り組む環境が整えられる子どもは多い。一方的な読字、書字に関する教授については、批判的な意見もあるが[3]、多くの子どもが自然と文字学習に対して興味を抱き積極的に学ぼうとするのである。

さらに、子どもの文字学習の指導法としては、上野（1980）が、「具体的な個々の対象物と対応させながら、視聴覚教材の活用による直観的方法を通して、活発な興味と主体的な意欲の中でこそ、効果的な学習を進め永続的な効果として定着させていくことができる」[4]と述べるように、小学校入学以前にはその興味に任せて適宜手本を与えるのがよい。しかしながら、文字を理解しない幼児ははじめ、文字を文字として認識していない。前述の、山田が観察した一人の幼児のように、身近な人の書字行為自体を真似しているだけという場合も多い。文字手本の捉え方も様々で、鏡文字と呼ばれる左右が逆転した形の文字を書くこともある。文字を図形として捉え、その細部にまでは分析が至っていないのである。

幼児の図形の異同判断において、3歳ごろまでは即座に反応するが、5歳ごろになると判断に時間を要する。その理由について村田（1974）は、「比較的年長の子どもは、図形の異同判断を求められるとき、それらの図形に含まれる種々の要素すべてについて同じか違うかを確かめる」ためであると述べる[5]。つまり、比較的年長（ここでは5歳ごろ）になると、幼児は文字についても各要素を比較検討することができるようになる。そのため、そのくらいの年齢の子どもには、細部まで統一した文字手本を与えることが望ましい。

現在日本おいて、多くの子どもが最初に学ぶ文字は、平仮名である。しかし、平仮名は字形が似通っていることから、子どもが学びにくいという側面も持ち合わせている。さらに、片仮名や漢字とは違って、その筆画には曲線的な部分が多く含まれ、高度な技術を要する。子どもの文字学習に関して、仮名文字から学ぶことの意義を阪本（1972）は、「文字 - 音韻間の対応がはっきりしている」ことを挙げており、アルファベットのように一字で複数の音韻を持つ文字よりも、入門期の学習に適していると述べる[6]。幼児は文字の音を声に出しながら書くことで、音と形を覚えることがある。日本人の読字・書字能力の基礎は、仮名の学習によって作られている。

1-2. 小学校教育における現行の文字学習

現在は、幼稚園や保育所等でも文字教育をする場合があるが、やはり本格的な文字教育が体系的に始まるのは、小学校である。現在小学校では、平仮名、片仮名、漢字の順に文字学習を進めている。文字学習の基本的な内容や目標に関しては、『小学校学習指導要領』（文部科学省教育課程課編、平成20年）に記載され、それによると、小学校書写においては、文字を「正しく、整えて、丁寧に」書くことが目標となっている。そのため、小学校で学ぶべき漢字1006字の標準字形が「学年別漢字配当表」として掲載され、漢字に関しては、具体的な手掛かりがある（勿論、これ以外を誤りとするものではない[7]）。書写の教科用図書（以下、教科書）に載っている漢字

の楷書の手書き手本は、これをもとにしており、書風の違いはあるものの、字形に違いはない。しかし、平仮名には字形に関して指標とすべきものはなく、教科書によって字形が少しずつ異なっている。そのため、学校ごとに、あるいは教師ごとに「正しい」平仮名字形が異なる。

確かに、現行の小学校第１学年書写用教科書において、判別の難しい平仮名は一文字もない。例えば、「せ」の２画目の終筆[9]は、「はね」とするものと、「とめ」とするものがある。同様に、「た」の三画目にも、「はね」と「とめ」が存在する。このように平仮名にも許容される範囲が存在し、私たちはそれらを間違いであるとしない。

しかしながら、文字の初学者である子どもには、このような許容の範囲に理解がない。未就学児[10]から小学校第２学年頃までの子どもたちが文字を習得していく様子を見ていると、ある程度文字を真似て書くことが身に付いた段階で、一画一画について検討する様子が窺える。手書き文字において、縦画が少しでも升目に対して傾いていたり、途中で少し折れていたりすると、「これは違う」と指摘する。「つ」のような曲がりの部分でも、形が少し異なると、それを敏感に捉えることがある。子どもの独特の表現で、同じ種類の文字を擬人化し「この書き方では右を向いているが、この書き方では左を向いている」（勿論、文字の向きを変えて書いているのではなく、その文字を生き物と表現し、顔がどこであると考え、その顔がどちらかを向いているような印象であるという指摘である）とか、「こっちは寝ているが、こっちは立っている」などというのを耳にしたこともあった。さらに段階が進むと、学校の教師の書く文字や、教科書の文字などを比較し、形の異なる部分を指摘する場合もある。そして当然、「どの書き方が正しいのか」という質問が発せられる[11]。

また例えば、現行の小学校第１学年書写用教科書における「や」の硬筆字形では、２画目はすべて１画目と交差していない。しかしながら、ある小学校第１学年児童に、１画目と２画目が接さない形の「や」の手本を示して書かせても、図１のように書いた（一箇所だけではなく、「や」を必ずこのように書く）。この児童は、既に小学校において平仮名と片仮名を習得している段階であるが、なぜこのように「や」の１画目と２画目を交差させて書くのかと尋ねたところ、「小学校の先生がこうしないと駄目と言ったから。」と答えた。一方、他の児童の中には、この１画目と２画目が交差する書き方は誤りであると否定する子どももいる。これらの書き方は、どちらも誤りではないが、現場の教師によって「正しい」という基準が異なり、それを学んだ児童は他の書き方を否定するという傾向にあることが分かる。

図１

問題なのは、文字に唯一の正しい形があるという概念の存在と、「どの書き方が正しいのか」という子どもの質問に対し、答えが統一されていないことである。

既に日常生活で文字を使用している者にとっては、筆画が少し傾いていることや、相対的な長さが少し異なることは、特に問題ではない。さらに、書く場合でも「とめ」や「はね」、「はらい」等が、その時々で変化していることもある。しかし、文字の初学者にとっては、これらの差は大変大きな違いなのである。習得するために、正しい書き方を知りたいというのは当然である。唯

一の正しい字形は存在しないが、まず形を覚える段階では、基準となるものを提示し、子どもたちの平仮名習得をより簡単なものにしたい。

2. 初学者のための字形を考えるにあたって

2-1. 参考とする文字初学者のための字形

文字初学者のための基準となる字形を考えるにあたって、文字教育の現状を考慮せず、新しいものを突然提示しても現実的ではない。やはり文字教育において、体系的に浸透している小学校書写教育における平仮名字形を基盤としたい。書写は、現在国語科に含まれ、独立教科ではない。それは様々な制度等の見直しの結果であるが、その激動の中で、書写（書き方や習字とも呼ばれた）で扱う字形も変化し、現在のものに落ち着いている。現在は、書写における書風が最も長く統一されており、書写といえば、このような書き方であるという、一つの確立を迎えたと言っても良い。またその教育を受け、現在の書写における書風を、美しい字の象徴と感じている人も多い。

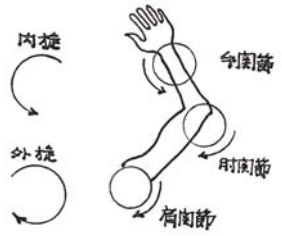
2-2. 子どもの手の動き

戦後の教科書には様々な字形が存在する。しかし、文字初学者の字形を考えるにあたり、それらの字形から標準字形を選択するというわけではない。

標準字形は、文字初学者である子どもの実態を考慮したものでなければならない。文字習得の状況に関しては既に述べたが、さらに重要な要素として、子どもの手の動きがある。子どもは技術的にも未熟であるため、鉛筆を持つことや筆圧を十分に加えることができない状況でも文字学習を行おうとする（勿論、文字学習を行うことによって、それらの技術を習得するのである）。そのため、子どもの手の動きの法則を次に紹介する。

林（1953）は、絵画表現における運筆の方向を分析し、その特徴をLC運動と名付けた[12]。これは、人がものを描くときに、「ものを描くことに関係する関節及び筋肉の性質からうける制約」があり、「特に描画表現及び書写に直接関係のある三関節、即ち手・肘・肩関節及び筋肉運動の自然性」に頼る容易な動きが、英字のLとCの字形のようであるために名づけられた[13]。これは、具体的には図2に示すような各関節の動きであり、「手関節は内旋方向が外旋方向よりも回旋し易く、大きな運動を伴なう肘及び肩関節は逆に外旋方向が容易である」ということである。林（1980）は、「この性質は（中略）平仮名文字の書写（中略）等の各分野においてその能率高揚の為に注目されてよいこと」[14]と述べている。この手の運動を考慮すると、硬筆の際には手関節の動きが最も影響を受けるため、内旋方向が書き易く、反対に毛筆の際には筆を持つ手関節は固定され、肘と肩関節の動きが影響し、大きな外旋運動が容易になる。

例えば図3に、まだ平仮名を覚えていない幼児が鉛筆で書いた「つ」を挙げる。これをみると、始筆から右への動きは外旋の動きであるため順調に鉛筆を運んでいるが、回旋して終筆へ向かう左への動きの際に、外旋ではなく内旋の動きへと変化していることが分かる。また、内旋の動き



出所：林健造（1980）
（「幼児の成長と文字指導」．『幼児と文字』．日本保育学会：128 頁より）

図 2

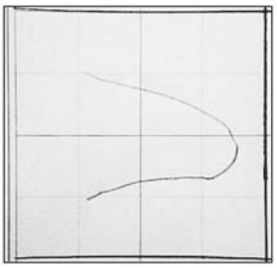


図 3

に変化する辺りから、筆圧も上がっているため、より書き易い動きとなったのではないか。これは、未だ字形を覚えていない幼児は LC 運動による書き方がより書き易いことを証明している。以上の動きを考慮して、文字初学者のための平仮名字形を考えたい。

なお、本論文では右利きを対象としている。さらに、現在小学校では第 3 学年より毛筆の学習が始まるが、本論文では毛筆の初学者として小学校第 1 学年や第 2 学年の例も扱う。小学生は、平仮名の字形を既に覚えている場合が多いが、その書き方は安定しておらず、また苦手としている児童が多いため、学年に関係なく、書き方の癖を分析した。また、硬筆と毛筆では苦手とする動きが異なる場合もあるが、それぞれの特性を考慮しつつ、やはり字形の細部が異なることのないよう、硬筆字形と毛筆字形をできるだけ関連させる。

3. 初学者のための「お」と「む」の点

3-1. 点の定義

本論文では特に「お」と「む」の点について言及するが、日常的に字形を伝えるときにも点という表現を使ってはいるものの、厳密に点とはどの筆画であるのかを示すのは難しい。なぜなら、点とは毛筆を置くだけで書けそうな印象だが、硬筆では特に、すべての筆画でしっかりと筆先を動かして書いているためである。また、現行の小学校第一学年書写用教科書において、点と明記している筆画は、平仮名の筆画ではなく片仮名や漢字におけるものだけである。

そこで、本論文においては、文字における点を次のように定義する。ごく短い筆画で、終筆が払いでないもの（つまり、止めかはね）、かつ小学生等の初学者が毛筆で半紙に一字程度を書く際に、穂先を動かさずに筆を押し付けて、筆圧だけで書いてしまうことの多い筆画を点とする。さらに、小学校書写の平仮名における点は、縦画でも横画でもなく、特に必ず傾きのあるものである。

従って、小学校書写において、点を含む平仮名は、「う」、「え」、「ら」（以上、1 画目）、「お」、「む」

（以上、最終画）、「な」（三画目）、「ふ」（1 画目、三画目及び四画目）、「や」（2 画目）の八字である（濁点は除く）。「か」の最終画は含まない。さらに、本論文では内旋の動きを伴い反るように書かれる点を、硬筆毛筆ともに「反る形」、反対に、外旋の動きを伴ってかぶせるように書かれる点を「かぶせる形」と呼ぶ（図 4）。

図 4

3-2.「お」と「む」の点の現状

現行の小学校第一学年書写用教科書における「お」と「む」の字形は、図 5 の通りである。最終画となる「お」と「む」の点は、終筆が止めで統一されている。小学校第 1 学年用の各書写用教科書における硬筆による点の終筆は、それぞれ 1971（昭和 46）年度、1977（昭和 52）年度に止めに統一された。文字の書き終わりの部分となるため、終筆が止めになるのは自然であろう。点においては、特に大きな違いはないが、直線的に書かれるか、ややかぶせる形で書かれるかという違いは、ごく小さいものである（人によって捉え方が異なる）。この部分の点は、硬筆では手元に近くなり、外旋のかぶせる形の点の動きは難しくなるが、敢えてそのように書くことで、平仮名特有の円みを帯びた形を表現することができる。

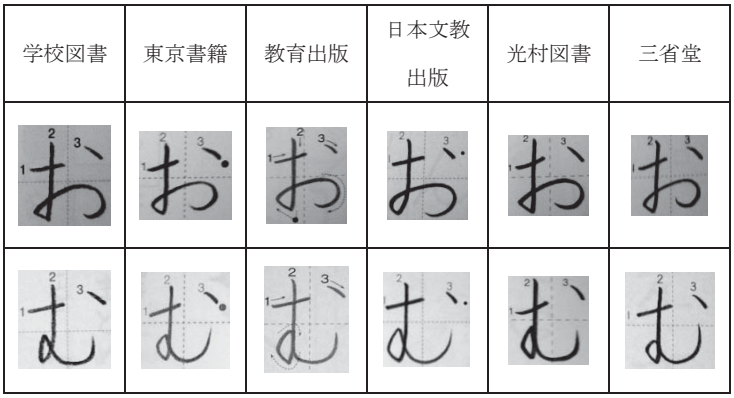


図 5

3-3. 硬筆初学者のための「お」と「む」の点

前述のように、現行の「お」と「む」の点の形は、外旋のかぶせる形で、文字の初学者にとっては、手元に近くなる位置でのそのような動きは難しい。しかし実は、「お」と「む」の点では、初学者特有の書き方を考慮すると、その方がより書き易くなる。

稿者は、「小学校書写教育における点について―「う」、「え」、「ら」を中心に―」において、「う」、「え」における 1 画目の点を、内旋の動きを伴う反る形に、「ら」の点を外旋の動きを伴うかぶせる形に書くのがよいと結論付けた[15]。これは、点の配置と他の筆画との関連によるものだが、「お」と「む」では、点が最終画となり、配置も「う」、「え」、「ら」と異なる。「う」、「え」、「ら」の点では、1 画目であるため、初学者である子どもは中心に大きく書いてしまう傾向がある。そのため、それ以降の筆画の余白を考えて「う」と「え」ではやや横への展開を大きくするのがよい。

しかし、「お」と「む」の点は、既に他の筆画があり、余白に書かなければならず、配置は右上方[16]に限定されている。

文字の初学者である子どもは、「お」と「む」を書く際に、1画目と2画目の動きを中心に配置することが多い。そのため、点を書く余白が小さくなる（図6）。しかしこの図6からも分かるように、書くべき範囲（升目）が決められている場合は、その升目の枠から出ることなく、さらに1画目と2画目に接したり交わったりすることなく点を書いていることが分かる。1画目と2画目が中心から右へ大きく展開しているため、縦長の空間に、縦向きの点を書いている。そして、空間や筆画の配置を意識して書くようになると、1画目と2画目を左へ配置し、点を書く余白を作るようになる（図7）。また、図6と図7に挙げるこれらの点を見ると、ややかぶせる形になっているものが多い。「お」では1画目を避けるように、さらに2画目の大きな回旋の動きに合わせるように、「む」では1画目を避けるか、2画目後半の円みを出す内旋の動きに呼応するように書かれている。勿論文字の初学者はこれ以外の書き方をする場合もあるが、この縦向きのかぶせる形の点を書く子どもが多い。余白を把握し、他の筆画に重ならないように書く場合、自然とこのような形になる。余白が狭い場合には、手の自然な動き（内旋）よりも、外旋の動きが現れる。

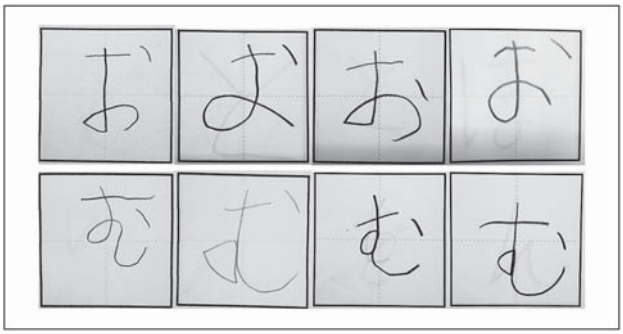


図6　未就学児～小学校第1学年児童による「お」と「む」

また、「お」と「む」の点には、終筆を止めにする場合とはねにする場合があったと述べたが、初学者には、はねは難しい。点は硬筆でも毛筆でも短い展開となるため、すぐにはねの部分がきてしまう。硬筆毛筆ともに初学者は、次の展開やその文字の全体像が見えずに書く場合がほとんどである。例えば「ら」を例に挙げると、図8（「ら」の前半部）のように硬筆の初学者では、はねを表現できず、折れとなり「く」の左右対称の形のように書く。「お」と「む」においては、限られた余白に書かなければならないため、やはり初学者には、点の終筆は止めであることが望ましい。

よって、硬筆初学者のための「お」と「む」の点は、図9のようになる。これは、実際に硬筆の初学者（小学校第1学年児童）が書いたものである。

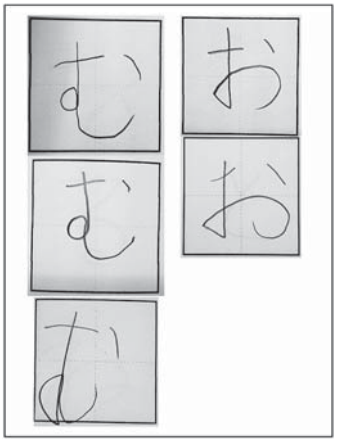


図7　未就学児～小学校第2学年児童による「お」と「む」

図8

3-4. 毛筆初学者のための「お」と「む」の点

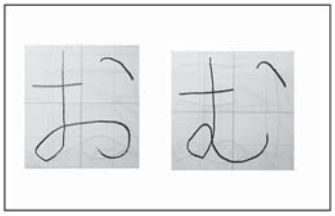


図 9

次に、初学者のための毛筆による点を考える。傾きは、硬筆のそれと同じである方が配置し易いだろう。加えて、毛筆による点には、送筆部に、三つの違いがある。つまり、書くときの穂先の向き、つまり穂先がどこを通るかである。まずは蔵鋒か露鋒の違いがあり、さらに露鋒には点の輪郭のどちら側を通るかという二通りの書き方（図 10）がある。蔵鋒による書き方以外は、中学校書写においても見られる。

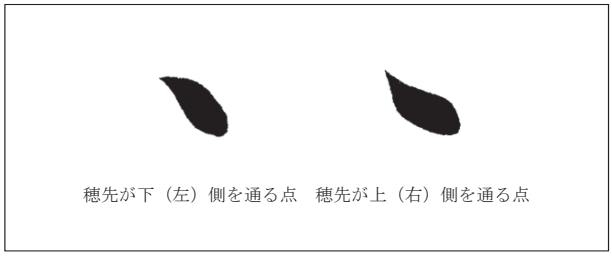


図 10

ごく短い点を書く場合、毛筆に慣れていない子どもは鋒を斜めに紙の上に置き、筆管を紙に垂直方向に押し付けることが多い。すると、押さえつけることによって、終筆となる部分は円くなり、いわゆるしずく型になってしまう（図 11）。このとき、穂先の毛が揃っていなかったり、墨量を多くして押さえつけたりすると、図 12 のような形にもなる。押さえつける力が強いと、筆の毛が割れて、終筆部がギザギザになったり、筆の毛が広がり終筆部から放射線状に細い実画ができてしまったりすることもある。これは、筆を痛めてしまうだけではなく、次の筆画を書く場合に、筆を整えなければならないため、よい書き方ではない。さらにその次の段階で、点も一つの筆画であるため、筆を少しだけ動かして書くよう指導すると、始筆の角度のまま、蔵鋒になるように筆管を少しだけ動かす場合がよくある。これでは少し細長いしずく型の点ができるだけで、結果としては少し毛の長い筆を押し付けたのと変わらない（図 13）。したがって、露鋒の二種類のどちらかを使う書き方が有効となる。

図 11

図 12

図 13

さらに、毛筆による子どもの「お」と「む」でも、硬筆の場合と同様、1 画目と 2 画目の縦の動きを中心に書き、点を書く余白がなくなることがある。その場合は、しずく型の点を小さく書く場合が多い。また、余白が少なくなったり、他の筆画と重ならないように書いたりすると、図 14 のように、穂先だけを使っ

図 14

て蔵鋒の細長い点になる場合も多い。毛筆による「お」と「む」も、やはり縦長の余白を活かし、点に太さを出すためにもかぶせる形の点にするのがよい。毛筆の場合は、外旋の動きがよりし易いため、硬筆より習得が早い。練習を重ねることによって、それが実現している例が、図 15 に挙げるものである。点を書く余白を残して書けるようになると、点も露鋒でしっかりと書くことができる。よって、初学者のための「お」と「む」の点は、はじめは直線的なものがよいが、すぐに曲線的なものを取り入れることができる。字形を覚えた段階では、この形でもすぐに習得することができた。

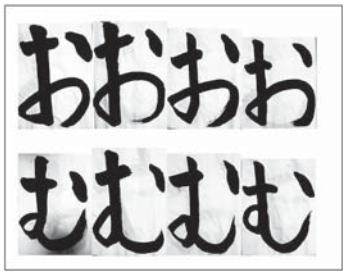


図 15

おわりに

はじめにも述べたが、本論文は字形統一を目指すものではない。文字初学者がより早く文字を習得し、その後さらに様々な書き方、筆遣いを習得できるよう文字習得の弊害を軽減できることを願う。今後は、他の筆画の動きや平仮名についても検討し、文字学習に微力ながら貢献したい。

注

（1）　山田英美『幼児の成長と文字』（日本保育学会『幼児と文字』昭和 55 年 4 月、26 - 45 頁）参照

（2）　野呂アイ『想像力と文字』（日本保育学会『幼児と文字』昭和 55 年 4 月、89 - 102 頁）89 頁参照

（3）　例えば、上野（1980）は、一方的な教授を通して、幼児の読字や書字能力を伸ばしても、それは一時的なもので、「真の学力としての永続的効果を期待することはできない」と述べる。それは寧ろ後の学習意欲低下の原因ともなり得るという。上野辰美『文字指導の問題点』（日本保育学会『幼児と文字』昭和 55 年 4 月、107 頁）参照

（4）　前掲（3）参照

（5）　村田孝次『幼児の書きことば』培風館、1974 年、40 頁参照

（6）　阪本敬彦『国語学習の心理Ⅰ』（金子書房『児童心理　第 26 号』、1971 年、165 - 210 頁）参照

（7）　文部科学省『小学校学習指導要領解説　国語編』平成 20 年
123 頁「第四章　指導計画の作成と内容の取扱い」「2 第 2 の各学年の内容の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の取扱い」に、次のようにある。

> 漢字の指導の際には、学習指導要領の「学年別漢字配当表」に示された漢字の字体を標準として指導することを示している。しかし、この「標準」とは、字体に対する一つの手掛かりを示すものであり、これ以外を誤りとするものではない。児童の書く文字を評価する場合には、「常用漢字表」（昭和五十六年内閣告示）の「前書き」にある活字のデザイン上の差異、活字と筆写の楷書との関係なども考慮することが望ましい。

（8）　現行の小学校第 1 学年書写用教科書は次の通り
渡部清ほか 6 名著『みんなとまなぶしょうがっこうしょしゃ一ねん』学校図書、平成 27 年

加藤祐司ほか 13 名著『しょうがくしょしゃ 1』教育出版、平成 27 年
中洌正堯ほか 8 名著『しょうがくせいのしょしゃ一年』三省堂、平成 27 年
平形精逸ほか 15 名著『新編あたらしいしょしゃ一』東京書籍、平成 27 年
池田利広、萱のり子ほか 11 名著『しょうがくしょしゃ一ねん』日本文教出版、平成 27 年
宮澤正明ほか 9 名著『しょしゃ一ねん』光村図書、平成 27 年

（9） 本論文では、硬筆、毛筆ともに筆画の書き始めを「始筆」、書き終りを「終筆」と呼ぶ。

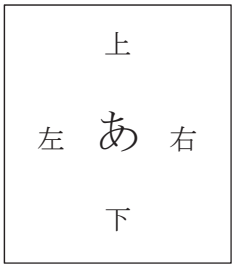
(10) 小学校入学以前の子どもを示す。

(11) 書道教室等にて文字を子どもたちに教えた稿者自身の経験をもとにしている。

(12) 林健造『描画表現と LC 運動　―錯画の成因及び左向原則の解明―』1953、『環境・表現』美術教育学会、134 - 150 頁参照

(13) 前掲（20）147 頁及び、林健造「幼児の成長と文字指導」昭和 55 年『幼児と文字』日本保育学会、127 - 140 頁参照

(14) 前掲（21）「幼児の成長と文字指導」128 頁参照

(15) 北山聡佳「小学校書写教育における点について―「う」、「え」、「ら」を中心に」平成 25 年 12 月 20 日『紀要人間・環境学』第 22 巻 109 頁 - 122 頁参照

(16) 本論文では文字における方向を、下図のように表現する。